「互いに愛し合いなさい」　　2018 年 05 月 31 日

ヨハネによる福音書 15 章 9 節～17 節　「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

主イエスは、ぶどうの木である私とつながり、実を豊かに結ぶ弟子となるなら、それによって神が栄光をお受けになると語られた。神の栄光は弟子たちの実りに現わされ、そして、その実りの内実は「愛」であると続けられた。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。」神が独り子イエスを愛されたように、主イエスは弟子たちを愛してきた。主イエスの愛の中に留まり続けなさい。主イエスが神の掟を守り、愛に留まっているように、弟子たちも主イエスの掟を守るなら、主イエスの愛に留まることになる。掟を守ることが愛の証しとなる。主イエスの話は、弟子たちが愛において喜びに満たされるためである。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」そして、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と、命を捨てることが究極の愛であると語られた。愛という言葉は人を嬉しく、暖かい思いに誘うが、それは愛されることを期待しての「愛」であるからである。聖書は愛される愛でなく、愛する愛を語っている。愛する愛は自らの痛み、犠牲なくして、現れることはない。

パウロは、コリント書（一）13 章「愛の賛歌」の 7 節で、（愛は）「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」と、信じ、望み、耐えるところに愛があると歌っている。この言葉は、ご自分の命を献げた主イエスが十字架上で信じ、望み、耐えて、罪の赦しという愛を現わされたことを知らされたパウロの本意である。

主イエスが命じたように、命を捨てる愛の掟を行うならば、あなたがたは僕ではなく、友である。僕は主人が何をしているか知らないが、私は神から聞いたことをあなたがたにすべて知らせたのだから、もはや友である。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」自分で選び取ったものは都合が悪くなると捨てる。主イエスに選ばれたから、襟首を捕まえられている。ここに信仰の確かさがある。主イエスが、弟子たちとつながることによって実を結び、神に願うことは何でも与えられるように任命したのである。「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」主イエスが選んだ弟子たちだから、神の栄光が現わされるために、痛みを負う愛の掟を生きる者になると励ました告別の説教である。